

# 『なぜクルマの速度を下げるとまちが再生するのか ～人とモビリティが共生するビルアペゼ戦略～』

2022年度から3年間にわたり、日本財団グローバル基金を活用して実施した「人と多様なモビリティが共生する安全で心ときめくゆっくりを軸としたまちづくり」研究調査の成果を取りまとめ、2026年6月20日に書籍を発刊しました。

## ■研究の背景・目的

「人中心のまちづくり」と言われて久しい一方で、実際の市街地においては、道路構造や交通環境、移動手段等において自動車通行の円滑化が優先される状況が多く見られる。また、車格の大型化が進む一方、生活道路等ではそれに見合う幅員での整備が十分進まず、歩行者の安全性・安心感の低下に繋がっている。そうした中で、「ゾーン30+」(注1)や「グリーンスローモビリティ」(注2)等の展開が始まっているものの、導入方法や運賃収入面等の課題がある。

そこで、道路の低速化と多様なモビリティの活用を主軸とした「ゆっくりを軸としたまちづくり」の手法に関して、海外の先行事例調査等を行うとともに、国内展開するにあたっての実現化方策や課題等を検討し、日本での「モビリティまちづくり」の姿を整理することを目的に本研究調査を開始した。

## ■研究活動の経過

三重野真代客員研究員(東京大学公共政策大学院交通・観光政策研究ユニット特任准教授、武蔵野大学経営学部経営学科特任教授)を中心とする研究チームが、学識と実務の第一級の方々が参画したアドバイザー会議(座長:石田東生・筑波大学名誉教授)において継続的に議論を行った。

そこでの助言を得て、国内展開にあたっての実現化方策や課題等を整理・検討し、「人と多様なモビリティが共生する安全で心ときめくまちづくり」が目指すまちの姿と国内での導入の方向性について取りまとめ、新しい制度的枠組みである「日本版ビルアペゼ」(注3)法(仮称)の必要性や実現に向けた方策について提言を行った。

(注1)「ゾーン30+」

生活道路における人優先の安全・安心な通行空間の整備の更なる推進を図るため、最高速度30km/hの区域規制「ゾーン30」とハンブ等物理的デバイスとの適切な組合せにより交通安全の向上を図ろうとする区域。

(注2)「グリーンスローモビリティ」

時速20km未満で公道を走ることができる電動車を活用した小さな移動サービスで、その車両も含めた総称。

(注3)「ビルアペゼ」(Ville Apaisée)

フランス語で、直訳すると「穏やかになったまち」。自動車を完全に排除するのでも、従来通り自動車を最優先するのでもなく、速度管理によって都市交通を穏やかに再編する都市戦略を指す。



編著者 三重野真代／石田東生＋運輸総合研究所  
著 者 谷口守／牧村和彦／桃田健史／森雅志  
出版社 学芸出版社  
体 裁 四六判・224頁(カラー:巻頭8頁)  
定 価 本体2,400円＋税  
発行日 2026年6月20日  
ISBN 9784761529758

### 学芸出版社の書籍紹介

<https://book.gakugei-pub.co.jp/gakugei-book/9784761529758/>



### Amazon購入サイト

<https://amzn.asia/d/OcW4mWHI>



### ■目次

「ビルアペゼ」で再生した海外のまち ～フランス・オーストリアの調査から～

小さなみちの大きな改革 石田東生 筑波大学名誉教授

第1章 世界の潮流は「脱・自動車ファースト」へ

第2章 世界の「脱・自動車ファースト」に向けた取り組み

第3章 速度制限で穏やかなまちをつくる「ビルアペゼ」戦略

第4章 「ビルアペゼ」を実現する五つの手法

第5章 日本版ビルアペゼ「ゆっくりを軸とした心ときめくモビリティまちづくり」の実現に向けて

鼎談

日本で穏やかな街をどう実現するか

牧村和彦 計量計画研究所常務理事・桃田健史 自動車ジャーナリスト・森雅志 富山大学客員教授

おわりに

谷口守 筑波大学名誉教授

謝辞

宿利正史 運輸総合研究所会長

2026年7月17日には東京大学公共政策大学院交通・観光政策研究ユニット(TTPU)と共催でセミナーを開催し、本研究調査の成果を報告するとともに、アドバイザーとして参画した有識者を交えて議論を行いました。詳しくは本誌P.27～をご覧ください。